

第22回 『教行信証』に学ぶ会 講師:延塚知道先生【ライブ版】

2023(令和5)年6月22日 会場 円徳寺

講題 :『教行信証』 信巻 真如一実の信海

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海の1

ごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

こんにちは、今日は、ちょっと天気が良くなりましたですね。出やすかったと思います。よかったです。ばたばたしておりました、まあいろいろばたばたしてまして、少し私もちょっとやせたかなあ、先程、ご挨拶をなさっていた田畑先生のモニターの画像をずっと見ておりました、「先生も年をとったなあ」と思って(笑)、よく考えたら僕は同級生ですから、自分のことはようわからんけども、「年をとったなあ」と思いました。

まあまあ、出来るだけ先に進みまして、まあ、『教行信証』で「行・信が終われば半学」と昔から言われます。半分以上進んだことになるというふうに言われますので、行の巻は一応終わりましたから、信の巻に今入ったところではありますが、この間は信の巻の別序を拝読いたしました。別序を開けてみて下さい。特に信の巻だけは、新たに「別序」という序を設けて、信の巻は教・行・証とは少し違う意味を持っているということをおっしゃりたいのだと思います。

教・行・証、これは大乘仏教の仏道を表すときに教・行・証と表すのは当然なのですが、特に浄土真宗という仏教は信心によって成り立つ仏教。信心によって覚りを開く仏教。龍樹以来、皆さんご存知の通り行の巻で読みましたね。「信方便の易行」という言葉を使いますけれども、信心によって阿耨多羅三藐三菩提を開くのだと。龍樹菩薩でさえ六波羅蜜の行という修行によるのではなくて信心による仏教もあるのだと、こう言って、信心によって覚りを開く、こういう仏教が

あるのだということをも龍樹から始まって親鸞聖人のところにまで続いて結実していくわけです。

ですから「総序」を読むと「教行証を敬信する」と、こういうふうに書かれて、教行証が成り立つのは信心によるからである。他力の信心によって『大経』を真実教と仰ぎ、他力の信心によって南無阿弥陀仏を、回向の法である、如来によって与えられた行であると。ですから、そこに如来の覚りは即開かれるのだと。そういう意味で、信心が浄土真宗の教行証を開く要になっているから、ですから、この信の巻にわざわざ「別序」を設けて信の巻を開いてくる。

普通信心というと、浄土真宗以外の場合には、ぼんやりとお釈迦様の教えを信じるから出家して、お釈迦様の教えを信じるから修行して、そしてその結果として悟りを頂くと。こういうふうには普通の仏教ならば、信心ということをもそれほど重要視しない。ところが信心に覚りが開かれる、こういう仏教があるのだと、いつも私が申し上げますけれども、教・行・信・証が終わって、『教行信証』の結実になりますが、東聖典298ページ（西335、島12-135）、これは大事な文章ですから、みなさん覚えるほど読んでみてください。ここまで『大経』・経典、それから回向の行信、そして、それに開かれる浄土の覚りを述べてきました。証の巻の一番最後ですね。

そこに、ここまで教・行・信・証を述べてきてお分かりいただけるでしょう、とこういう意味ですね。「しかれば大聖の真言」、大聖釈尊の教えは八万四千の法門があると言われてはいるけれども、ここまで述べてきてお分かりいただけるでしょうと、大聖釈尊の真理の一言、それは南無阿弥陀仏であるということがまことによくお分かりいただけましたはず。「大涅槃を証することは、願力の回向に藉（よ）りてなり」。ここにありますね。大涅槃の仏様の覚りの世界をいただく、それを凡夫の自力と言うのなら、そんなはずはないと批判される。しかし、それは本願力の回向によっていただくのだと。南無阿弥陀仏の行・信、これは回向の行・信だからね。だから南無阿弥陀仏の行・信が起こればそこに本願力の回向によって大涅槃をいただくのである。はっきりここに書いてますね。ですから『大経』の仏教は涅槃の覚りを得る仏教。しかし自力ではなくて願力の回向によっていただく仏教である。この通りです。ここに書いてある通りです。

そして、仏様の還相の利益、浄土から帰って来て、私たちのところに菩薩としてはたらく、浄土からの「還相の利益は、利他の正意を顕すなり」。これは仏様の利他の最も正しい意味を表すのである。こういう文章なのですが、これは還相の利益と言うのは、お釈迦様の最も利他行の優れた正意を顕すのであるということですから、還相の利益は、釈尊が『大経』を説いてくれたことと。こういう意味です。一切衆生に、すべて願力の回向によって涅槃の覚りを与える。そういう大きな『大経』の教えを説いてくださったこと、これが仏の還相であり、仏の利他なのだということ言っているわけです。

「ここをもって論主（天親）」、ですから天親菩薩は「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」と言っていて、「一心」の信心を明らかにしてくださった。しかしこの信心は「廣大無碍」、わたしたちの、衆生の信心は小さなものだけでも、願力回向の信心は世界中を包むほど大きな信心であり、なにものも妨げにならない大きな一心・他力の一心を説いてくださった。そして「あまねく雑染（ぞうぜん）堪忍（かんにん）の群萌を開化す」。信心だから、修行によって覚りを悟るのではない。信心さえ起これば、皆さんが聞法をして信心さえ起これば、誰でも救われていく仏教だから「雑染堪忍の群萌を開化す」。雑草のように生きる、そして煩惱に染められて、煩惱から少しも離れることができない。いつも自分を立てたい根性で人とけんかばかりする。そういう群萌までも

開化してくださる。それは、立派な心になって修行しなさいと言うのではなくて、自力無効と言うことを通して凡夫に帰って、仏様の他力の回向の信心に頭を下げて、いただくからですね。そういう廣大無得の信心を世親菩薩が説いてくださった。すごいことですね。

世親菩薩は何度も申しますように龍樹・天親はこれは菩薩ですから、だから自分で覺りを悟るのだということが本領です。ところが、その龍樹が「信方便の易行」と説き、世親がまた「一心帰命」と言う信心を明らかにして、そして誰でも救われていく道を、この信心によって開いてくださった。「宗師（曇鸞）は大悲往還の回向を顕示して」、曇鸞大師は、その仏教の往相も還相も全部仏様のはたらきであると。こういうことを明らかにしてくださって、「ねんごろに他利利他の深義（じんぎ）を弘宣（ぐせん）したまえり」。なんと丁寧にも、人間には本当の意味で教化はないのだと。「他利利他深義」というのはそういう意味です。本当の意味で教化ということはないのだと。もしあるとすると、はっきり言います。「教化される」ということだけがある。だから教化ということが分かるかどうかということとは教化されているかどうかによります。自分が教化することなどあり得ない。そうですね、そうではなくて、先生に遇った、教化されたのだと。そういう人が初めて仏の教化を言う資格がある。

他利利他の深義というのは、人間の方から教化する力はないのだと。そうではなくて もしあるとしたら、教化されるということだけがある。そして教化された人の信心に涅槃の覺りが開かれるというのは往還の回向によるからだと言った曇鸞大師が明らかにしてくださった。ここに世親菩薩、曇鸞大師、この一字ずつをとって「親鸞」と名乗りましたね。ですからこの教・行・信・証という証の巻が終わる時にお二人の名前を出して、はっきり言うと龍樹と世親は本当は、「空」の菩薩である龍樹と、「唯識」の菩薩である世親とは系統が違うというふうに、みんなに思われているかもしれないけれども、本願の信心という意味では一つなのだと。龍樹は信方便と言ひ、世親が他力の信心を説いてくれた。回向の信心を説いてくれた。だから、この他力の回向の信心によって、私たちのような凡夫でも涅槃の覺りを頂くのだと。それが教・行・信・証という、今まで説いてきている内容ですと、こういうふうに最後に親鸞聖人がおまとめになってくださっているわけです。

なかなか難しいですね。回向の信心というのがね、なかなか難しい。ただね、実際面から申しますと、この間、二十日ほど前でしたか、鹿児島に行ってお話をさせてもらいました。そうしたら法話が終わってから、手を挙げて質問なさった方がいらっしやった。皆さん名前を言ってもいいでしょう。鹿児島に櫟 暁（いちい さとる）先生という大変有名な先生がいらっしやいましたけども、その櫟（いちい）先生のお嬢さんでした。「私は櫟（いちい）です」とおっしゃっていましたから。お嬢さんと言っても若くないよ（笑）、もう70歳ぐらいの御婦人でしたけども、その方が「先生、不思議だと思うのです。病気で父が死ぬときに横でずっと看病していましたが、いや不思議です。何にももう分からないのです。世間のことなんてもう到底分からないし、ところがうわ言のように仏法のことをしゃべるのです。その仏法のことをしゃべる時はどこも間違っていないでした。いのちが終わるまで、意識がないのにしゃべっている。意識がないのにしゃべっているけど、それはどこも間違っていないでした。あれは何ですか」と訊かれました。

実は私も同じ経験をしました。申し上げましたように松原祐善先生がガンで亡くなる時に、お体が丈夫だからなかなか死ねないのです、丈夫な人は。だから最後には、もうガンがあちこちに回って、しまいには水頭症というのでお亡くなりになる時に、本当にこんな頭になりました。布

袋さんみたいな、水がたまって、だから「ウー」とうなされているときには、なんかうわ言をおっしゃっているのですが、その大きな声で、例えばこうおっしゃいましたね。「私は生涯仏様に背き続けて生きてきた者であります。こんな痛さでは仏様に申し訳ない身であります」と叫ぶのです。それとか「こんな私のような者が死んでいける者にまで育てられました。ありがとうございます」と叫ぶのです。どこも間違っていないでしょう。「あれ何ですか」と訊かれても、僕はお答えすることはできませんけれども、私の先生もお亡くなりになる時には、他のことは何もわからなかった。しかし、こと仏教に関しては、どこも間違っていないと言ったら、「ああ先生、やっぱりそうなんですか」と言うから、これはまあ解説したらいけないけども、信心というのは、人間が何かを信じるといふ心よりも、そうではなくて、もともといただいた仏様のいのち、初めからいただいた分別が始まる前のいのち、生まれて四歳くらいまでは仏様の世界を生きていると僕はよく言いましたね。そして、そのいのちは死んでいくとか、生まれたとかいうことを超えているいのち、無量寿のいのち、その無量寿のいのちが分別を突き破って南無阿彌陀仏として出てきたのだから、だからこのいのちが終わるまでは絶対間違っていないことを言うと思いますよ。と言ったら、なんか涙ぐんでいました。

他力回向と言うのはうまく言えないけども、人間の分別を超えて、本当の本来のいのちが名乗りを上げた。そしてこの南無阿彌陀仏のいのちの通り生きていきたい、南無阿彌陀仏のいのちは南無阿彌陀仏の世界から来たのだから、仏さんの世界に帰るのは当然だと、もう自信と言うか事実というか、まるきり、あるがままの事実、それをおっしゃっているのだというふうに思います。ですから、それを他力回向とか、仏様の方からいただいた仏様の心だとか、仏様のいのちだとか、いうふうに表現するしかないから、他力回向というふうに言いますがけれども、やあ本物は恐ろしいね、恐ろしい、僕は死ぬのが怖くなってきた。ばれそうで偽物が（笑）。いやいやほんとほんと、そういう先生にお会いした。そして「同じような世界を生きた先生方はみなそうだった」とおっしゃるから、回向ということは、いのち終わるまで南無阿彌陀仏のこのいのちが叫んでいるのだと、こういうふうに考えた方がいいかもしれないなというふうに思います。

それで別序を、この間の復習・反省ですが、特にこの別序のところも、はっきりと宗祖が自分のお名前を、フルネームを出してお書きくださっていますね。（東聖典 210 頁、西 209、島 12-54）「ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して」。諸仏如来は、これは全部阿彌陀を褒めているのだから、阿彌陀は根源仏ですからね。ですからどんな仏様たちも真実の教えに信順して、「論家・釈家の」、インド、中国、日本とたくさんのお念仏者が生まれてきた。その念仏者の代表として七祖を上げます。だから七祖という個人じゃないですよ、これはね。インド全土を念仏の声に染めていった、中国全土が念仏によって生きていった。その代表として龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導という方々のおっしゃっていることをよく披いて拝読いたしましたと。

特に「広く三經の光沢を蒙（かぶ）りて」、『大經』・『觀經』・『阿彌陀經』、この教えをいただいて、こういう時にはこれ分かりますかね、例えば、『觀經』だったら、自力を尽くしなさい。そうですね。自力を尽くせば、この間申しましたようにお釈迦様はちゃんと分かっている。人間の出発点から間違っているのだから、自力を尽くしたら結局ドツボにはまるということは初めから分かっている。救いはないということはお釈迦さんの方が見抜いているから、自力を尽くしなさい、頑張んなさいと。頑張って、頑張って、頑張ったら必ず救いが無いということが分かるから、そこまで頑張んなさいと。そして『大經』の本願に目覚めて行きなさい。こういうことです

ね。

ところが本願にせっかく目覚め、念仏の教えにせっかく目覚めても、皆さんの胸によく手を当てて考えてごらん、また、これいつかお話をしますけども、「三毒五悪段」の貪・瞋・痴の煩惱を超えなさい。この教えは弥勒菩薩が叫ぶのです。最後に、三毒五悪段の最後で、今までお釈迦様、あなたの「貪・瞋・痴の煩惱を超えなさい」という教えをよく聞いてきたと。素晴らしい教えだと。そしてそれは、その教えは世界中の人間に当てはまる普遍的な教えです。それだけではない。過去現在未来、今に至るまでどの人にも当てはまらない教えはない。貪・瞋・痴の煩惱を超えなさい。分かりますね、せっかく仏教に目を開き、仏教を聞法していても、何か自分を立てる盾にする、仏法を。そして、なんか自分を自慢らしく振舞ってしまう。仏教に目覚めていてもまだそれが消えない。だから『阿弥陀経』は、一心不乱に念仏して、そして最後に反省を超えた深い愚痴の煩惱ということがある。その愚痴の煩惱まで見抜くのは阿弥陀さんしかいないのです。だから阿弥陀さんが「果遂ぜずば正覚を取らじ」と誓っている。救い取るのは阿弥陀さんの方で、自分の方がいつの間にか救われなくてはいけないと頑張っていく。如来の仕事を盗むなと、救うか救わないかは私の仕事ですと仏さんの方が宣言している。そうやって貪・瞋・痴の煩惱をそのまま救い取る。

だから、私たちはやはり情けない話ですけど、申し上げたいこと分かりますね。どれだけ仏教を聞いても死ぬまで自分の根性は抜けません。仏法まで利用する。情けない話でね。それをそのまま見抜いて、手を放しなさいと、こう言って下さっている『阿弥陀経』がどんなにありがたいかと、こう言うわけです。ですから「三経の光沢」と言う時には、『観経』の自力から、『大経』の本願へ、本願に帰したとしてもまだ自力の根性がすたらないのをそのまま救い取るからと、しっかり仏教を学びなさいと、こうおっしゃってくださっている『阿弥陀経』、これが大事なのだと、こういうふうに『大経』、『観経』、『阿弥陀経』は、これは、この世の私たちの生きる具体的な教えです。そうですね。

ですから化身土の巻には、『観経』と『大経』との違い、『阿弥陀経』との違い、それを明らかにし、そしてすべて三経は本願の救いに導くためであるというふうに化身土の巻には「三経一異の問答」、これが大事ですね。「広く三経の光沢を蒙(かぶ)りて」とこう言うのですから、これは信の巻を超えて、化身土の巻の三経一異の問答まで視野に入っているということ。いいですね。そして「**特(こと)に一心の華文を開く**」、世親菩薩の「一心」、一心になぜ大涅槃の覚りが開かれるのか、その道理を推求するのが一心と三心。『大経』の「至心・信樂・欲生」、こちら側(三心)は衆生の信心、こちら側(一心)は如来の心、如来の願心。本来、これはちがうものですが、回向の信心と言うときには、一心と三心とは別のものではない。

だからさっき言ったように衆生の信心であっても仏様の心と言ってもいいし、南無阿弥陀仏の本當のいのちと言ってもいい、そう言う仏様の心が一心として起こってきてくださったのだと、それを証明するのが信の巻の三一問答。こちら側(一心)は真諦。真実の世界、仏様の世界を開く。こちら側(三心)は私たちの具体的な生活、俗諦。化身土ですから。しかし清澤先生がおっしゃるように、真の仏弟子と言うのは、片一方は仏様の覚りの世界についている。片一方の足はこの世の現実を生きている。だから片一方の足は如来の方につけ、もう片一方は娑婆を生きている、化身土を生きている。だから信の巻と化身土の巻は真諦と俗諦で遠く離れているから、別々のことを書いているように思いがちですが、そうではなくて、私たちの両足をつけている真諦と

俗諦、これを言っているのだから紙の裏表と思いなさい、信の巻と化身土の巻はね。

そして俗諦は、この世の教えは当然お釈迦様の教え、釈尊の教え、『大経』。真諦の方は当然、阿弥陀の覚り。この二つを「しばらく疑問を至(いた)して」、そして「ついに明証を出だす」。明証というのは大涅槃の覚りのことです。だから信の巻、化身土の巻と遠く離れているようだけれども、どちらも真諦と俗諦として疑問を出して、その疑問に明らかなる答えを出していきたいと、それが信の巻の三一問答ですよ。直接的にはね。というこの別序の内容になっているわけです。そしてこれはいつもそうですが、「誠に仏恩の深重なるを念じて、人倫の呾言(ろうげん)を恥じず」。人から「馬鹿か」とこういうふうに言われるかもしれないけれども、少しも恥とは思わないと。「浄邦を欣(ねが)う徒衆」、浄土を欣う方、そして「穢域を厭(いと)う庶類」、この世がつらいと思う方々は、「取捨を加うといえども」、この『教行信証』を取るか捨てるかはご自由だと、けれども「毀謗(きぼう)を生ずることなかれ」。分かりますね。五逆誹謗罪に当たるからです。取るか捨てるかはご自由だけれども、非難してはいけないと、仏法をね。

これは、これまで何度か申し上げて来たように、親鸞聖人は『大経』の教えの通りに『教行信証』を書いているから、自分の自信を言っているのではなくて、書いていることを取るか捨てるかはご自由だと、「馬鹿かとか、こんなあほなことがあるか」とか言うことはやめてくれと、「お釈迦様に申し訳ないだろうが」と、こういうお気持ちのわけですね。だから、ご自分の御意見をお書きになっているのではなくて、『大経』の通り私は開顕しているのだから、どうか非難することだけはやめてほしいと、お釈迦様に申し訳ないだろうかと、こういう意味ですね。こういう序が配置されて信の巻が開かれていきます。この信の巻は行の巻を拝読したときに、皆さんと一緒に読みましたね。行の巻の最初を開けてみましょう、もう一度。

157ページ(西141、島12-6)になります。「謹んで往相の回向を案ずるに」、如来の往相のはたらきをよくよく考えてみると、そこに第十七願、第十八願がたてられている。つまり「大行あり、大信あり」、念仏申さんと思いたつ心として起こるのだから行信という区別はあっても、行信は別なものではありませんと。ここから始まるわけです。ですから、この行の巻と信の巻とは紙の裏表のようになっているということをよく腹に入れて読まないといけません。特にここは、行の巻ですと「大行とは、すなわち無碍光如来の名(みな)を称するなり」とこうあって、「この行は、すなわちこれもろもろも善法を撰し、もろもろも徳本を具せり」。この南無阿弥陀仏の行は、これは法蔵菩薩の永遠のご苦勞を、「善法」と言うのは法蔵菩薩のご苦勞とを考えてください。法蔵菩薩の永遠のご苦勞を撰し、そしてそれによって「徳本」というのは、私たちが仏になっていくことです。ですから法蔵菩薩のご苦勞と私たちが仏になっていくということまでちゃんと収めた行、それが南無阿弥陀仏の回向の行ですよ。こうあって、その次に「極速円満す」、凡夫のままで大般涅槃の大きなはたらきの中に包まれて、凡夫のままで必ず仏になっていく、こういう不思議なことが起こる。それが極速円満です。

そして「真如一実の功德宝海なり」、それは、私たちは、自分の自我を中心にして、いつもそれが正しいと勘違いして生きている。そうではなくて、自我ができる前の一如・真如の世界、それこそが本来の世界である。真如・一実の功德宝海である。そういう世界をこの大行が開くと言うわけですね。ですから念仏が開くのは、念仏の法のはたらき、それは二つ。一つは「極速円満」、これは凡夫が立派な菩薩になって、あるいは、凡夫が聖者になってというのではなくて、凡夫が凡夫のままで大きな仏様の世界に目を開いて、必ず仏様の世界に帰る者にさせられた、それが極速

円満。そしてもう一つは「真如一実の功德宝海」。大きな真実、私たちはそれぞれ個性があり、それぞれ癖があり、どうにもならない。けど、仏様の世界に目を開けば、「ああ、この癖・個性、これでよかった、ありがたかった」と言って、それがそのまま輝く。それは一人だけではなくて、全部みんなそうだと。そういうふうにはたらきはどんな人も本来の本来性を回復して、本来の世界に生きていく、そういう本来の世界を開く。だから念仏の法は、この二つのはたらきを開くわけです。

今度は信心という「機」ですから、そうですね、信心は機だから、そうすると信心の機、機というのは衆生の方の問題。信心の機は、この二つ（極速円満・真如一実功德宝海）のはたらきをどんなふうを受け取るか。こういうことになりますね、信心の機ですから。それが信の巻の、今度は行の巻と対応して、信の巻を開けてごらん、東聖典211ページ（西211、島12-55）、「謹んで往相の回向を案ずるに、大信有り」。分かりますね。人間の心ではないよ、如来の往相の回向、法蔵菩薩のはたらきによって大信をいただくのだ。

ちょっと横道にそれるかもしれませんが、先程、田畑先生と少し『浄土論註』のお話をしていたのです。『浄土論註』というのは、皆さんご存知のように、世親の『浄土論』の一字一句の註釈書なのです。ところがその一字一句の註釈書なのですが、世親のそもそも『浄土論』は、これは菩薩の論書でしょう、菩薩のね。その菩薩の論書を凡夫の仏教に変えているわけですよ。註釈を通しながらね。そうするとこれは、みんな、「あ、あ」と言うかもしれないけど、菩薩の仏教をそのまま註釈しながら凡夫の仏教に変えるなんていうことは、これは天才しかできません。だから『論註』は読みにくい。菩薩道のことを言っているのか、凡夫の救いを言っているのかよくわからない。『十地経』がいっぱい出てくるし、菩薩道の七地沈空を超えるとかなんとか言うのがいっぱい出てくるから、これはいったい何を言っているのかよく分からないのですよ。

ところが、今言ったように凡夫の仏教に完全にひっくり返してしまうという仕事をしたのが曇鸞大師です。それで、この、先程も申し上げていたのですが、法蔵菩薩のご苦勞ね、これは『大経』で言うと勝行段よ、勝行段。勝行段というのは分かりますか。本願がずっと説かれるでしょう。そして「三誓偈」（「重誓偈」）が説かれるでしょう。そしてそのあと、東聖典27ページのところ（西26、島1-24）、ここに法蔵菩薩のご苦勞が始まるのです。四十八の本願を建てた、この本願を実現するために、「不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植（しゃくじき）して、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず」と説かれるわけです。欲覚というのは、これは貪欲です。瞋覚というのは瞋恚の愚痴です。害覚というのは、これは愚痴の煩惱。そうすると法蔵菩薩は、貪欲・瞋恚・愚痴を持つ衆生を救うために不可思議兆載永劫かかったのです。そうですね。そう書いてある。そしてここは簡単なのです。そのあと「欲想・瞋想・害想を起さず」と言うのだから、法蔵菩薩が修行をするときには、人間のような貪欲や怒りや、それから愚痴を起ささない。「色・声・香・味・触・法に着せず」。あらゆることに執着しないで、「忍力成就して衆苦を計らず」。今言った執着から離れて、そして一切の人の苦を、それをはるかに超えて修行をなされた。だから貪欲のところには、「少欲知足にして、染・恚・痴なし」。少欲知足という心をもって法蔵菩薩は修行をなされた。それは貪欲を救うためよ。少欲知足というのは分かりますね。欲を少なくして足ることを知る。

仏法というのはそうでしょう。そもそも、「これで十分だ」と言って救われていくわけでしょう。私たちは、まあ皆さん恵まれて育ってきたけども、これはあまりいい例えではないけれど

も、恵まれなかった人がいるでしょう。岐阜の高山の、足やら手がなかった、生まれてきて苦労した。そして苦しんで苦しんで苦しんだあげくに法蔵菩薩の本願に救われた。その時にはそれこそ「正信偈」ではないけれども、「ある、ある、ある、みんなある」と。自分の手がないと思っていたけれども、ちょっと小さい手もある。足もある。全部ある。これで十分だと言って歌うでしょう。そう中村久子さんですね。ああいうのを見ると感動するでしょう。これで十分なものとして救われていくのだから、だから少欲知足、当然のこと、もうこれで十分だといういのちを生きていきなさいと、法蔵菩薩が救って下さる。だから法蔵菩薩は少欲知足をもって修行したと、こう説かれています。

それから、すぐに腹をたててけんかする。腹を立ててけんかする時にはたいがい自分を正当化する。そして他人が悪いと必ず言う。人のことではない僕のことです。けど、そういう心が起こった時には、「馬鹿だな」と思って仏法を聞きなさいと。「和顔愛語」、和やかな顔をして、優しい言葉をかけあってお互いに仏法を聞いて行きなさい。「意（こころ）を先にして承問（じょうもん）す」。法蔵菩薩はね、分かる、「意を先にして承問す」というのは。本当は、衆生が本当に求めているものは何なのか分からないわけです。時には金であったり、時には地位であったり、時にはまあ広末涼子さんのようなきれいな人であったり、その都度その都度狂っていく。けど、本当に求めているものは何かということを知っている法蔵菩薩は、「意を先にして承問す」。「衆生が本当に求めているものは、実は無量寿・無量光ですよ。何物とも比べないでいいということですよ。浄土ということですよ」と言って、私たちが思ってもいないものを先に提示する。これが「意を先にして承問す」ということです。私たちは目の前にあるものでいつも狂っていくけど、本当は、実は浄土を求めているのだということを不可思議兆載永劫の間によく知って、浄土を建立していった。それが法蔵菩薩のお仕事です。

ということがここでずっと説かれていってね、そして東聖典27ページの終わりから4行目、「自から六波羅蜜を行じ、人を教えて行ぜしむ」。こんなふうに説かれていって、たったこれだけなのです。法蔵菩薩のご苦労といっても、たったこれだけなのです。たったこれだけだけでも、大変大事なことが書かれているけど、けどね、『浄土論註』を読むと、『浄土論註』の下巻の終わりの方は大変難しいのです。

まあここは『浄土論註』の講義ではないからあれやけど、この辺、皆さんの聖典でいうと東聖典285ページ（西313、島12-122）、証の巻の還相回向のところですよ。ここは不虛作住持功德のところから説かれる。『論註』に曰わく、「還相」とは、かの土に生じ已（おわ）りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林（ちゅうりん）に回入して」という、これは本当は『論』の文章ですけども、この文章をもとにして、『論註』は註釈をずっと続けていく、ここは長いこと還相回向の文章として引いていきます。ここは貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱を持った者をどうして救うか。それは菩薩が智慧・慈悲・方便によって、これは大乘仏教の基本ですね。菩薩というのは真理を見る智慧と娑婆を見る智慧、迷いを見抜く智慧、その智慧を持っている。だからこうして衆生を見るとあまりにも可哀そう。自分で一生懸命自我を立てて、それが正しいと思って、それを主張する。そして最後まで自分を譲らない。執着。それをどうやって救うか、それはまずは智慧によって衆生をよく見ること。それは、あまりにも可哀そうだと。

執着というのは、この中に仏教が分かった人が何人もいると思うから、はっきり言うけど、仏教に遇うとね、今まで正しいと思って自分に執着し、自分を主張し、自分を一生懸命言っ

た。そしてそれは死ぬまで抜けないかもしれない。けどね、仏教の教え、真実に遇った時には、その執着は何の根拠もないということが知らされる。何の根拠もない、ただ執着があるだけ。根がない、根が。根があるのはさっき言った初めから頂いた仏様のいのち。これはどう考えようもなく真実である。この真実なるものに遇った時に、今までの執着は妄想であった。根がない、立場を失う。消えるわけじゃないけど、妄想が立場を失う。意味がなくなる。消えるわけじゃない、起こってくる、次から次に。だけどそれは立場がないということがいったん分かった者は、もう狂わない。また起こってきた、「あほやなあ」と思う(笑)。あほなことだから、なんぼでも起こってくるんだ。起こってくるけど、なんの根拠もないから、もうとらわれる必要がないのだと。正しい根拠は南無阿弥陀仏だけだと。こういうことが起こるのですね。

だから法蔵菩薩はちゃんと人間の執着だけで、何の根拠もないのだと。それを一生懸命教えようとするのですが、智慧と慈悲と方便、方便は説法です。説法によって「それは違うよ」と教えようとするけど、教えようとされている人間の方は「そうやね」と言って、また自分の自我に取り込むから、なんぼ言っても分からない。だから不可思議兆載永劫かかった。そして最後に法蔵菩薩はもうあきらめます(笑)。「もうしょうがない、お前たちはあほや」と、「分かった、それだったら、もう俺が信心になる」と言って、法蔵菩薩は曇鸞大師の『論註』の一番最後に、「もういい。信心なんて起こすことは無理だし、仏教が分かれと言っても無理だから、だからしょうがないから、俺が「妙楽勝真心」(みょうらくしょうしんしん)、(東聖典295、464頁、註1)、要するに本当の信心になって、本当の信心になって、あなたたちの中にいのちを捨てるのだ」と。こういうふうに『論註』は書いていくわけですよ。

註1 妙楽勝真心 : 行者が五念門を行じて得る自利利他円満の真実心で、浄土の最勝の真実の徳(妙楽勝真)にかなう菩提心のこと。親鸞聖人はこれを法蔵菩薩によって成就された心と見なし、他力信心の徳をあらわす名とする。(西聖典註釈版:証巻 P.330、二門 P.548、西聖典七祖篇:浄土論 P.40、論註 P.149)

すごいと思いませんか。つまり『大経』にないことを書いている。『大経』の勝行段(東聖典27頁、西26、島1-24)にはそういうことはないね。信心にまでなるなんて書いてないでしょう。ところが曇鸞の今のところをずっと読むと、法蔵菩薩が苦勞をして、そして、最後にはもうあきらめたと、「おまえたちはあほや」と、しょうがないから俺が信心にまでなって、あなたたちのいのちにいのちを捨てるのだと、だから、「この私を用いて仏になれ」と、こういうふうに曇鸞の『論註』は最後に叫ぶのですよね。そうすると、これは『大経』の勝行段の意味を曇鸞が実に詳しく説いてくださっている。『大経』にないことまで曇鸞が説いてくださった。なぜ、そんなことができたかと言ったら、曇鸞はよっぽど我が強かった。よっぽど自分の我に苦勞した。よっぽど凡夫であるということに苦勞したのでしょうね。だから、法蔵菩薩はもう「しょうがない」と。「私があんたの中に命を捨てて、私があんたを助ける」。こう言って最後には、法蔵菩薩は「私たち一人ひとりの中に身を捨てて、他力の信心にまでなってやる」と叫ぶわけです。それは『大経』の勝行段にはないのです。そこまで書いてないのです。分かるでしょう。だから親鸞聖人は、これを読んだ時にものすごく感動したのだと思う。

僕は恥ずかしい話だけど、小樽で10年間講義していた、『論註』をね。今のところが長くて分かりにくいよ。それで、今まで論文に書く時はそこをはずしていたよ。面倒くさいから。何や智慧・慈悲・方便によって立ち上がって、そして厭離自身、自分を楽にする根性を離れる、そして他人を救う根性によって自分を修行するとか、他人を救う根性は、今度は貪・瞋・痴を超

えることだから、煩惱をどうやって超えていくか。これは何を言っているのか。つまり浄土の菩薩の話なのに、なんで煩惱を超えるなんて書かなくてはいけないのかという。そもそも浄土の菩薩の話だから、そしたら煩惱を超えてるのは当たり前やな。そうなのに何でこんなふうに煩惱を超えていくと書かなくてはいけないのかと、よくよく『大経』を読んでみると、貪・瞋・痴の煩惱を救うために苦勞しているわけだから、だから浄土の菩薩でもそこまで下りてきて、そして私たちの苦勞を背負って、さてどうするかと苦勞をしたのです。ところが最後にもうお手上げだ、お前ら馬鹿だと、どうにもならないと、「だから私はあなたと一つになります、あなたのいのちの中に命を捨てます。そしてあなた自身の信心にまでなります」と宣言するのよ。すごいと思いませんか。それは『大経』にはないのです。『大経』の勝行段にはないのです。親鸞はあれを読んで泣いたと思う、私は。私は『論註』を講義しているときに、それがぐわーっとこみあげてきて、人の前で恥ずかしくも、おんおん泣いたのです。親鸞もそうであったろうと思ったら何かたまらなくなって、おんおん泣いたことがあるのです。

そうや、そこから『大経』を読んでいるから、六波羅蜜の行と書いているのに、親鸞聖人は不可思議兆載永劫の修行は五念門の行だと、こういうふうに読むでしょう。あれは『論註』の方の法蔵菩薩のご苦勞の方が勝行段よりももっと詳しく書いてるから。だから今申し上げたように信心というのは、私たちの心ではなくて法蔵菩薩が身を捨てたのです。皆さんの中に今法蔵菩薩が生きている。その法蔵菩薩がやがて時期を得て名乗りを上げるです。南無阿弥陀仏と。その時に、今言った『論註』の長い文章が、「ああそうやった、そうやった」ということが分かるということになっている。申し上げていることが分かりますかね。

そんなふうに他力の信心の道理を曇鸞大師が詳しく説いてくださっているのが『論註』だから、あれは難しいけど大事なのです。そしてこの他力回向ということがどういうことかということがよく分かる。分かるでしょう。法蔵菩薩がもう身を捨てたのよ。あなたたちのいのちになったのよ。そしていのちの深いところから時々言うてくるのです。「お前もうちょっと頑張れ」とかね、「お前そんなのでいいのか」とか、「えらそうにするな」とか、いのちの深いところから言うてくる。それが全部「わが名を称えて、我が国に帰れ」と言うことやったんや！ということが分かったら、オッケーよ（笑）。他力の回向ということは分かるでしょう。法蔵菩薩が身を捨てたの、あなた方のいのちになったの、だから法蔵菩薩のいのちが必ず南無阿弥陀仏の名乗りを上げるから、それを他力の信心と言うのだと、「他力の信心に私になるのだ」と宣言しているのが曇鸞の『論註』です。ちょっと休憩しましょう。（休憩）

講義 2

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。

それでは、残りの時間、先ほど申しましたように回向と言う事実は、今日一番最初に話しましたように、なんか「本当のいのちが湧き上がった」と言う表現もしましたけれども、『論註』を読むと、法蔵菩薩は、最後には、もう手を焼いてあきらめて、そして、あなたたち一人一人のいのち

ちの中に私は入り込むと、そして、あなたたちのいのちになって、この法蔵菩薩のいのちが湧き上がるまで聞法をしてくれと。それまではちょっといたずらをして、「そんなのでいいか」とか、「もっとがんばれ」とか、いろんなことをいのちの奥の方から言う。それが、「いつまでそっちで我を張って頑張ってるんや」と。「わが名を称えて、我が国に帰れ」と言う呼び声であったということが分かるまで聞法してくださいと。こういうのが法蔵菩薩の願いなのよ。それは『論註』を読むとよく分かります。

宗祖は『論註』の方から、回向ということはどういうことかと言うことがね、回向、回向と言葉では分かるよ、「回向」とか「おあたえ」とかいろいろ言うけど、それはどういうことやと言うと、私のいのちにまでなってくださった。そして遂に南無阿弥陀仏と言う声をあげてくださった。全部法蔵菩薩のおかげであった。こういうふうに回向の具体的な事実は、「身を捨てた」ということだということを多分感得なさったのじゃないかなというふうに思います。

それでね、当然法蔵菩薩のお心が、私たちのところに信心として湧きあがった時には仏様の世界を開くのだと。行の巻では、それは「極速円満」。そしてつまり極速円満というのは、凡夫が凡夫のままでということ。必ず仏になるということ。それから「真如一実の功德宝海」。これは一如・真実。比べる必要がない。そして誰とも比べる必要がない、そういう大きな法のはたらきに目を開いたのだと。だから法の方から言うと、この二つの広い世界を開いた。これが親鸞聖人の行の巻の記述です。

そうすると、今度は信の巻、これをどういうふうに受け取ったのか、これが信の巻ですね。そこをみますと、別序の後、(東聖典211頁、西211、島12-55)、「謹んで往相の回向を案ずるに、大信有り。大信心はすなわちこれ」、その次からね。

「長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術」、まずこの二つからね。「長生不死の神方」というのは分かるでしょう。曇鸞大師が、曇鸞という方はどうも結核だったらしいね。それで命が早く終わるということがあって、仙人の陶穩居のところに行って、命を長らえる法を、仙教を持って、揚子江を越えて北の方から南に下って、陶穩居のところまでそれをもらって意気揚々と帰って来て、洛陽の都まで帰って来たときに、菩提流支三蔵と会ったのです。菩提流支三蔵は馬に乗っていたらしいけど、曇鸞が下の方から、「お前は仏教者だと威張っているけど、俺は、これ実際に命を長らえる法を持ってきたんや。これに勝る法があるか!」と言ったら、菩提流支三蔵がペッ!と唾を吐いて(笑)、「お前が言っているいのちは迷いのいのちだ。迷いのいのちをどれだけ伸ばしたとしても何の意味もない。目覚めて生きよ。目覚めて無量寿に生きよ」と言って、『観無量寿経』を与えたと、こう言われますね。

だから長生不死の神方というのは、おそらく、そういう今の出来事をふまえて長生不死の神方という言葉遣いですが、言っていることは「無量寿」。今言っているのは東聖典211ページです。信の巻の最初。「謹んで往相の回向を案ずるに、大信有り」。大行、大信有りの大信有りやね。そして「大信心」。「大」とついていては分かれますね。他力の信心です。回向の信心です。如来のはたらき。その信心です。「大信心はすなわちこれ、長生不死の神方」。ここよ、「長生不死の神方」ね。これ皆さん分かるでしょう、長生不死の神方ともう一つ「欣浄厭穢の妙術」。これは言葉遣いから言うと「欣求浄土」、そして「厭離穢土」。この世は苦しい穢土だから、この世を仮の世と思って、本当の国の浄土に帰りたい、本国に帰りたい。そういう智慧を持った。こういうことですね。だからこれは、言葉遣いはおそらく曇鸞のさっきのことを背景に置きながら、「長生

不死の神方」と言ってますけども、これは「無量寿」。

会場から質問が入る：先生、その「長生不死の神方」とか「妙術」と言う言葉遣いが、何となく仏教ではない、むしろ何と言うか、神官、神社に近いような、そんな感じが僕はイメージとして湧いてくるのですけど。

先生：あなたのイメージを否定する気は全然ありませんが、そのイメージを補填する気もありません。そうお感じになると言うのだから、しょうがないけども、しかしこれは「神方」と、神という字が時々出てきますね。これは仏様のことを言っているのです。「開神悦体」とか、神を開いて体で喜ぶ、『大経』の言葉です。だから「神」と言う言葉が時々出てきますが、これは仏教では仏様の覚りのことです。神様ではありません。「開神悦体」とよく書いてるでしょう、曾我さんが。神の世界を開いて体中悦ぶ。これは『大経』の言葉ですけど、仏様の世界を開いて、体中が「諸根悦予し姿色清浄」（『大経』発起序）であるという、そういう意味です。ですからイメージは僕は否定も肯定もしませんが、『大経』ではこの「神」というのは仏様だと思ってください。

それで、ここは「長生不死の神方」と言うのですから、死なない命ですね。これは無量寿ですね。そうですね。そして「欣浄厭穢」というのは、この娑婆をよく見る智慧です。この世は頼りになるものは一つもない、自我を中心にしてこの世を見ると、金や地位や権力や、全部自我を中心にして見た見方ですね。しかしそこには頼りになるものは一つもない。本当に頼りになるのは浄土である。娑婆を見抜く智慧と身体を見抜く智慧、これは無量寿に対して無量光。まず親鸞聖人は無量寿、無量光ということをおぼえておられるように思われます。

これは皆さん分かるでしょう。お釈迦さんに初めて阿難が会うやろう。そうしたら阿難は「諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします。明らかなる浄鏡の表裏に影暢するがごとし」（東聖典7頁、西8、島1-6）。鏡の裏を貫くが如く光っておられる。「光に遇うた！」と叫ぶでしょう。光明無量でね、そしてお釈迦様のお姿はこの世を超えて巍巍と輝く、ヒマラヤよりももっと大きいというでしょう、無量寿。だから仏教に遇った最初は「無量寿・無量光」という感動。私の愚かさを全部見抜いて、そして分別はなんの頼りにもならないということを知らされて、分別を超えた、生きることも死ぬことも超えた「無量寿のいのち」に立ちなさい。これが仏教の基本やね。

だから親鸞聖人の「正信偈」だったら、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」と、こうおっしゃるわけで、それは阿難もそう言っているし、それをふまえておそらく、ここで言ってるというのは、こういう南無阿弥陀仏の法が大きな仏様の世界を開いてくださった。その時に智慧の光に遇ったということと、死んでいくいのち、死なないいのち、私たちの、いいか悪いか、勝つか負けるか、損か得かという全部相対分別を超えて永遠のいのちに今立った。だから、まあ喜んで死んでいくとは言わないけども、「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり」（『歎異抄』第九章）と。実に事実そのものを言っているでしょう。そういうふうに、信心・機の方から言うと、法に遇った時の感動は「無量寿・無量光」。ここから始まる。これは当然じゃないでしょうか。ですから、ここでは「長生不死の神方」、無量寿に遇った。「欣浄厭穢の妙術」、娑婆を見抜く智慧と、浄土が真実であるという智慧、それに遇ったのだと。そして「私のどこにも根拠がない」ということを知らせて、そして、「無量寿のいのちに立て」。ここに仏教の一番の基本があるから、この二つはそれを表しているのだと思います。

その次、「選択回向の直心」。さっき言った法蔵菩薩のまっすぐな心をいただいた。そして「利

他深広の信樂」。これを頂いた。「金剛不壞の真心」。これは何か分かりますか。本願は「至心・信樂・欲生」を誓っている。だから選択回向の直心というのは、『大經』で言えば、法蔵菩薩の真つ直ぐな心、これをいただいて、初めて自分が愚かであると、何の根拠もないことを、いかにも根拠があるかの如く勘違いして生きてきた。恥ずかしかった。この懺悔から始まる。だから、選択回向の至心に触れた。仏教に触れた時に私たちに起こることは懺悔です。それがまず最初です。だから至心、至心というのは仏様が真実の心になってくださった。つまり、私たちにはどこにも真実はないと、こう言って頭を下げる。これが選択回向の直心です。

そしてその次、「利他深広の信樂」というのですから、これは至心信樂の信樂やね、つまり本願そのものです。信心といっても私たちの心じゃなくて本願の信樂が起こってきた。こういう意味で選択回向の直心、至心。利他深広の信樂。利他というのは仏様の大きな私たちを助けてくださるはたらき。そのはたらきが至心・信樂として、今私たちのところに現れてきたのだ。そしてその信樂さえ起これば、どんな邪（よこしま）な考え方、いや邪じゃなくていいや、世間の考え方にも負けないで、まっすぐに本願の世界に生まれたいと思う。それが「金剛不壞の真心」。ですからこれは、本願の至心・信樂に戻せば欲生。本願の欲生心によって、私は金剛心をいただく。この三つ（選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心）は、ですから多分第十八願の至心・信樂・欲生というそのはたらきに触れて感動した。まず自分の中に真実などない、初めて頭が下がった。その時に他力の信樂がわが身を貫いた。そしてその願心によって浄土に生まれていこうという金剛心をいただいた。こういうふうに、これは多分、十八願の至心・信樂・欲生に合わせてお説きになったのだと思われませんか。

これはやがて、さっき申しましたように信の巻では三一問答に展開するから、第十八願の至心・信樂・欲生、これをもとにして、宗祖はここで「選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心」と、こうおっしゃった。そしてこれは因願。分かりますね。因願に対して成就。この因願が私たちのところに成就したときに、今言った懺悔から始まって、そして他力の信心を生きる者になって、必ず浄土に生まれる者になった。それが因願に即して言った時ですけども、これは成就文でいうと、「易往無人の浄信」、この言葉が出てきますね。これはまた後で出てきますが、一ページめくってください。東聖典212ページ。ここになりますと、当然のことですが、信の巻ですから、『大經』に言（のたま）わく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲（おも）うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覚を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除く、と」。これは『大經』の第十八願の文ですね。分かりますね。

それに続けて、今度は因願ですけども、因願。『大經』はいつも申しますように『大經』、それから『平等覺經』、『大阿彌陀經』は古い訳。『無量寿如来会』と『莊嚴經』は新しい訳。だから『大經』は古い訳だから、『無量寿如来会』を必ず親鸞聖人は引いてくる。これは新しい訳だから、だから新しい訳の『無量寿如来会』の因願を引いてきます。つまり第十八願、さっき読んだところと同じ意味の文章が出てくる。言葉は少し違います。せっかくだから読んでおきましょう。

『無量寿如来会』に言（のたま）わく、もし我無上覚を証得せん時、余仏の刹の中のもろもろの有情類、我が名を聞き已（おわ）りて、所有の善根心心に回向せしむ。我が国に生まれんと願じて、乃至十念せん。もし生まれずは菩提を取らじと。ただ無間悪業を造り、正法およびもろもろの聖人を誹謗せんをば除く、と。已上」

これは『大経』の因願と同じ意味を説いている新しい訳の『無量寿如来会』の因願です。

そしてその次に今度は、『大経』の本願成就文が出てきます。これは皆さんもうよく読んでいるから分かるでしょう。

「本願成就の文、『経』(大経)に言わく、諸有(あらゆる)衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上」

これは『大経』の本願成就文ですね。

その次に今度は『無量寿如来会』の本願成就文を引いてきます。いいですか、読みますよ。ここを言いたかったのよ。

『無量寿如来会』に言わく、他方の仏国の所有の有情、無量寿如来の名号を聞いて、よく一念淨信を發(おこ)して歡喜せしめ、

この「一念の淨心」に印つけておいて、『無量寿如来会』の方を見ると「一念の清らかな信心をおこして歡喜せしむ」とありますね。

「所有の善根回向したまえるを愛樂(あいぎょう)して、無量寿国に生まれんと願ぜば、願に隨(したが)いてみな生まれ、不退転乃至無上正等菩提を得んと。五無間・誹謗正法および謗聖者を除く、と。已上」、これはいいですね。

そうすると、この『大経』の本願成就文と『無量寿如来会』の本願成就文を読むと、これね、これを言っている時間ないか…、そもそも『大経』の本願成就文は、「諸有(あらゆる)衆生、その名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念までも至心に回向して」と読んでいた。うん、おかしいね。浄土宗はみんなそう読んでいます。だから浄土宗の『浄土宗全書』を引くと、第十八願の今の文章の読み方は、今言ったように、「諸有(あらゆる)衆生、その名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念までも至心に回向して、かの国に生まれんと願ずれば」と、こう読んでいた。もともとはこう読んでいました。

ところが親鸞聖人は、「諸有(あらゆる)衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。」で丸を打った。そして、この「乃至一念」は「信心歡喜」と同格になった。もともと浄土教の読み方ですと、「諸有(あらゆる)衆生は、その名号を聞いて」、善知識が唱えなさいという名号を聞いて「信心を起し」、乃至一念というのは、「臨終の一念までも真心を込めて念仏を回向しました」と、こう読んでいた。だからもともとの浄土宗の読み方だと、この「乃至一念」というのは、念仏のことであつた。これはまた今度詳しく、もう一度字を書いて説明しないと分からないね。ところが親鸞聖人は「乃至一念せん」のところで丸を打って、この「乃至一念」は信心のことであるというふうに読んだ。そうすると「至心に回向」というのは読めないようになるから、わざわざ「至心に回向せしめたまえり」という仮名を打って、「如来の回向」というふうに読み方を変えたのです。これは親鸞聖人の読み方だからね、もともとの読み方ではないわけです。だからもともとの読み方は、この乃至一念は行の一念だった。念仏だった。ところがこれは並べてみるとよく分かるでしょう。『無量寿如来会』の方をよく見ると、「一念の淨信」と書いてある。行でなくて信心と書いてある。だから親鸞聖人はこの「乃至一念せん」に丸を打って、「信心歡喜せんこと、乃至一念せん。」として、信心と読んだ。それは『無量寿如来会』の読み方と一緒にしたということになる。だから、この「一念の淨信」という言葉は本願の成就文の言葉です。

こちら側(至心)は因願、それはそうでしょう。本願は至心・信樂・欲生と誓っているのです

が、私たちの心には、一念の浄信として実現する。それは世親菩薩もそう言っている。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」。一心帰命の心として起こる。信心として起こる。だからこれは因願に対して成就文。『如来会』の成就文の言葉の使い方ですから。

ですからここは、まず、無量寿・無量光から始まって、本願の至心・信楽・欲生と押さえられて、それが私たちの衆生に実現すると「易往無人」。行きやすいけど本当の信心を持った者はあまりいないと書いてある。そうですね、どう。「易往無人の浄信」。これが本願成就の信心を表します。そして「心光摂護の一心、希有最勝の大信」。これは『観経』だ。言葉遣いからしてね。その次、「世間難信の捷徑（せっけい）」。これは『阿弥陀経』やね。そうすると『大経』の本願と本願成就文を書いて、そのあと『観経』の「心光摂護の一心」、これは分かりますか。一切の人が摂（おさ）めて、護（まも）って、私たちを育ててくださる。「心光摂護の一心」。そして「希有最勝の大信」。行きやすいけど、本当の信心を得る人はいないから希有人、「希有最勝の大信」。それから『阿弥陀経』では、信じがたい「世間難信の捷徑」。『大経』で言えば「証大涅槃の真因」。信心こそ大涅槃を開く因である。そして最後に「極速円融の白道」。これですね、極速円融の白道。そして「真如一実の信海」。これですね。

だから、この極速円融と真如一実ということをもってきて、そして私たちが無量寿・無量光という感動をいただく。そして本願の三心によって、自力無効の懺悔をいただき、法蔵菩薩の信楽を生きる者になって、あらゆる世間の価値観から離れて、ダイヤモンドのような固い心で、壊れない心で浄土に向かう者にさせられていく。それは誰でも行きやすいけども、なかなか清らかな信心を実現することは難しい。何でやろうか。ねえ、なかなか難しい。何ですか。

会場から：素直じゃないから。

そうですね。素直に私たちの努力が実って信心をいただけるのなら、これは、まだ頑張ればいいわけです。ところが、頑張っても頑張っても信心がいただけない場合が多いですね。結局、これはどうも、先生に遇わないと分かりません。こういうことになるね。だから先生に遇うということが他力の仏教の特徴です。自分の素直な心で信心を得られない。それで先生に遇って、今度は、素直に求めていた心が反対向きに向くのよ。こっち側に。そして、もともと法蔵菩薩の心だったんやということに気付く、それを回心と言う。分かるかな（笑）。言ってること分かるでしょう。人間というのは理想主義だから、一生懸命頑張って信心を得たい得たいと頑張るでしょう。この前言ったように、頑張ってもやっても、これは努力が足りないからやとしか思えない。そして何ぼ考えても真っ直ぐ行こう真っ直ぐ行こうとするでしょう。すると、その時に先生に遇って、「何を言っているのですか。出発点から間違っているよ」ということを教えられると僕は言っているのです。

結果ばかり求めるでしょう、僕らは。結果ばかり求めるから、求められなかったら努力が足りないからとしか思えない。それを二十年もやったのです、親鸞は。そして法然に遇った時に、「何を言っているのですか。そもそも人間は人間になった時に、四歳くらいで自我が生まれた時に、仏様の世界から背く者になったのだから、だからその上にどれだけ努力を重ねても本当になるはずがない」というふうに、「出発点が間違っている」ということを教えられるのです。だから「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」（『歎異抄』第二章）。出発点が違っているのだから、どんな努力をしても地獄になることに決まっていると言っているのです。

というふうに、他力の教えはおっしゃる通り、まっすぐな気持ちで求められると、それはそれとして頑張ったかいはあるのですが、頑張っても頑張ってもどうも自力と無関係なところで、先生の教えに会うということが大事です。逆に言うと先生の教えに遇った人はいいいね。ねえ、いいね、安定感があつて。この間から僕は、ある方のお書きになったものを読ませてもらったけど、「ああ、この人はやはり立派な先生に遇ってよかったなあ」と思った。**会場から**：「どなたですか」。**先生**：「そこにおられる垣本（かきもと）さんです」（垣本知子述『大いなる世界—細川巖先生の教えを通して—』）。細川先生に遇って、それがもとになって仏法を聞き始めた。そして「今の私はこんなふうに思う」ということを書いてくださった。「ああ、いいなあ」と、「ああ、この人は人に遇っている」。だから、人に会うということが、ある意味大事だというのは、これが他力の仏教の特徴です。自力の仏教だったら、自分の力を伸ばせばいいのだから。ところが、いくら伸ばしても追いつかない。

先生に遇って、今度は反対にこっち（外）側を向いていた根性が、こっち（内）側を向かせられる。そして、「ああ、今までなにか自分を追い立てるように、何かいのちの深いところから来とったあれは、「我が名を称えて我が国に帰れ！」という呼び声やったんだと。始めから、人間になった時から仏様の世界に背いていたのだから、これはどうにもならないと、初めて懺悔の心が起こる。如来の真実心に遇って頭が下がる。そしてさっき言ったように、人間の心で浄土に往くと思っていたら大間違いだと。仏様の、法蔵菩薩の至心・信樂によって、本願の世界に帰る者になりました。そして仏様の欲生心によって、ダイヤモンドのような固い心をいただきました。こういうことですね。

ですからおっしゃる通り、やっぱり先生に会うということが他力の仏教の特徴です。その時にもう一つ言うと、一切のもので救われると思うと、本能というのは恐ろしいから、「救われる、救われる」と言っている根性が自力だから、前にも言ったように、小松に、一昨日小松に行ってきたんや。そのおばちゃん来てなかったんや（笑）。死んだかな（笑）と思った。「自分こそ助かるはずだ」という根性が抜けないから、そういう根性で聞いている。だから、いつまでたっても自力無効にならない。

ところが今言ったように、その根性はなかなか切れないからね、それはやっぱり、さっき言ったように、人間がその根性を切ろうとしても切れません。向こうから切ってくれる。なぜかと言うと、如来が真実心になってくれる。至心というのは「真実になる」ということです。だから、三一問答を読むと、至心積のところは、曠劫よりこの方ずっと自分は流転してきたのだということから始まる。それが真実の遇ったということです。真実に遇うと、さっき言った私たちの方の我執、それになんの根拠もないということを教えられる。そして、清澤さんの言い方だと「我如来を信じるとき、煩惱の雲霧が消える」と。煩惱が立場を失って消えると、「如来を忘れるとき、自分の煩惱にまみれて苦しくなる」と。だけど如来ということがあると、自分の執着に何の根拠もないということを知らされる。根拠のあるのは、初めからいただいた仏様のいのちだけ。これは真実。後から生まれた自我は、これは言葉をもとにして生まれてきたのだから、人間の癖、産物、これは真実という根拠がない。だから妄想は立場を失うと、清澤さんは言います。立場を失うのだと。なかなか難しいけど、だから、こっちから自分は妄想だとか、だめだとか思ってもなかなか切れない。ところが本願に頭が下がったとき、真実に遇うたというときには、真実が切ってくれる。そういう関係になっているのだというふうに思います。

この間、私のところの三軒ある門徒、その中の一軒の山ノ内さんという人が責任役員をしてくれている。知っている方もおると思うけど、よくできた人でね、僕がおらんときも、もう20年くらい寺を護ってくれて、そうやから、報恩講に帰ったり、夏休みに帰ったり、彼岸に帰ったりするぐらいだから、そうしたらもう「奥さん、奥さん」言うて野菜持ってきてくれたりするから、報恩講で酒を飲んだとき、いつもその人のことを「おい、住職、住職」と私は呼んでいるのです(笑)。その方がこの前死んだ。亡くなった。ああ辛かった。辛かった。すい臓がんで最後は。亡くなる12日前だったかな、僕行こうと思っていたら、そしたら向うから呼びに来て、「ご院家さんすぐ来てください」。「なんや」と言ったら、「山ノ内がどうしてもご院家さんに会いたいと言っている。だから来てくれ」と言う。そういうことで行ったのです。そうしたら、やせ細って、点滴をしていた。それでも意識ははっきりしていた。ちゃんと話ができる。「なんや、何で呼んだんや」と聞いたら何か言うだろうと思って。そうしたらなんと、「お礼が言いたい」と言う。「ご院家さんにお礼が言いたい。私は人として生まれてきて、いろいろあったけれどもご院家さんに遇って私は嬉しかった」と言って涙を流すのよ。「何言っとるんやお前、こっちの方がお礼が言いたいわ」言って、私は訳も分からないのに帰って来て、周りのことを教えてくれて、家内も「山ノ内さんからよくしてもらったから、もし帰らんかったら山ノ内さんを裏切ることになる。私はそんなことできん言っつて、帰ってきたんやで」って言ったら涙を流していましたけどね。

そうしたらこう言いました。「もう、頑張れんようになった」。「もう、頑張らんでいい」。「そもそも頑張れへんかったんやで」、いのちに対しては誰もね。けど頑張れると思うでしょう。そうしたら頑張れるという根性がだんだん無くなって来て、また自分のいのちと、本当のいのちと向き合ってしまったわけや。そうしたら、「もう、頑張れんようになった」と言うから、「もうそれは頑張らんでいいけど、そもそも頑張れんかったんやで」。生まれてきたいと言って生まれてきた訳でもないし、自分の思いで生まれてきた人は一人もいない。一生懸命頑張っつて思い通りやろうと思っつている時には忘れてるけども、今初めて本当のいのちと向き合っつているのです。だから「頑張れない」、それはその通りです。

そしてもう一つ言いました。「ご院家さん、俺はこれからどうしたらいいのか」。「それは、南無阿彌陀仏を称えなさい」と言ったら、不安な顔をしてたから、「南無阿彌陀仏というのは、私が生まれる前から、仏様のいのちをいただいた。そして何でか知らんけど山ノ内に来たんやなあ。生まれたんやなあ。だから仏さんのいのち、その仏さんのいのちの名前を南無阿彌陀仏と言うんや。そう思いなさい。だから南無阿彌陀仏・南無阿彌陀仏と言うのは、ただ南無阿彌陀仏と称えっつているのじゃなくて、「命のまま任せます。生きてもいい、死んでもいい。南無阿彌陀仏と称えっつて仏様のいのちそのものに帰ります。その通りです。」とっつて念仏しなさい」と言ったらね、握っつていた僕の手を放して、何をするのかと思っつたら、手を合っつせて合掌した。

そうしたら「俺はどこへ行くんやろうか」と言うから、「馬鹿なことを言うな。南無阿彌陀仏の世界から来たんやから、また南無阿彌陀仏の世界に帰るんや」。「そうしたらな山ノ内さん、この体の痛いのかも解放されるんやで。私がとっついう根性からも解放される。光り輝く仏さんの智慧の世界に帰っつて行く。だから何も心配せんでいい。仏さんの世界に帰っつて行く。もし根性が悪くっつて帰れんかったとしても心配するな。向こうから「迎えに来る。」とっつてるから。ちよっつと山ノ内さんの方が早いけど、うちの奥さんもすぐ行くから、向こうで見っつつけて可愛がっつてくれや」と言っつたら、「うん」と言っつていた(笑)。そうして「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏」と言っつてい

た。

こういう話をしているとやっぱり仏教はすごい、ありがたいと思うけど、分かる、分かるけど、やっぱり何でこんな病気になったのかとか、何で俺だけこんなにして死んでいくのかということがどうしても抜けない。そうだから時々腹が立ってくる。

「泣いてもいいか」と言うから、「いい」と言った。「いいのか」と言うから「いい」と言った。「泣いてもいい。親鸞聖人は『凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず』(『一念多念文意』東聖典545頁)と書いているから、だから起こってきたら泣いてもいい、ちゃんと親鸞さん許してくれるから、優しい人だろう」と言ったら、「うん」と言っていた。

「ご院家さんも同じようになったら、どうする」と聞くのです。「そんなもの聞くな」(笑)と思った。「分からん私は。ひょっとしたら泣くかもしれないし、さわぐかもしれないけど、ひょっとしたら『ああ、また訳の分からん根性が起こってきたなあ』と思って、まあそんな根性に振り回されるくらいなら、念仏した方がいいかなと思うかもしれないよ」と言ったら、「はあ、はあ」と言っていた。まあそんな話をしました。

分かりますね、煩惱は死ぬまで消えないのだけど、いったん仏教に触れた人は根拠がないということを知られる。起こってくるのは臨終の一念まで起こる。起こるけど起こったことに振り回されないですむ。起こってきたときに「ああ、また馬鹿な根性が起こってきている。念仏しよう」と、こう言ってなんとか超えていく。だから「まあ起こって来ても心配するな、泣いてもいいぞ」と言った。それから三回ほど行きましたかね。一番最後の日に行った時にはもう意識不明でした。ただもう動物みたいにして、痛いんやな、すい臓が。だから「ううん」て言っていました。お会いして手を握って帰ったのですが、その6時間後、12時過ぎに命を引き取りました。まあ大変や。人が一人亡くなるということは大変ですよ。

皆さん他人事と思っているかもしれませんが、そろそろですよ(笑)。いや、ほんと、ほんと、大変よ。だけど、やはり最後には南無阿弥陀仏のいのちしかない。妻子や財宝、かねてたのみおきたる妻子や財宝は何の役にもたない。「後生の一大事をたのめ」と言うでしょう。「生きていても死んでも真実なる如来のいのちに目覚めなさい。それが生死を超える道だ」とこう言ってるわけですよ。「無量寿に立て」「南無阿弥陀仏に立て」、これが大事だというふうに思いますね。親鸞聖人はそういう感動というか、こっちにいただく機の方の感動を12かな、ここ(長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信楽、金剛不壊の真心、易往無人の浄信、心光摂護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷経、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海)、法はたった二つ(極速円満・真如一実功德宝海)ですけど、だけど最後はこの二つの法でまとめて、こっち側がいただくはたらきを細かに説いてくださっている。これはまあ阿難がお釈迦様に会った時の感動と考えてもいいというふうに思います。ここから信の巻が始まっていくということになりますね。今日はそれでは時間がまいりましたので、ここまでにしておきましょうか。

質疑応答

質問者1・・・最後のところでちょっと分らなかったところがあるのです。212ページの6から始まって、9の『無量寿如来会』の「一念浄信」というところの、ずっと先生の読まれた場所が、8番の最後のところまでは、『無量寿如来会』に言わく、」のあとずっと行って、その後が分からなかったのです。

先生・・・『大経』の成就文と『無量寿如来会』の成就文を比較しながら、親鸞聖人の『大経』の成就文の読み方を少し説明しましたね。

質問者1・・・その後です。

先生・・・その後、つまり僕がここで言いたかったのは、「信心歓喜せんこと、乃至一念せん。」、丸で切ってね、分かるでしょう。

「乃至一念」を『無量寿如来会』の成就文で見ると「一念の浄信」となっているから、だからこれを信心というふうに読んで、丸をうったのですよと。ここまではお分かりになりますね。

質問者1・・・そこはわかります。その後です。

先生・・・(会場から:その後211ページに戻りました。)そして、だからここでは「易往無人の浄信」とありますね。東聖典211ページの親鸞聖人の信心の徳を表す文。「大信心はすなわちこれ、長生不死の神方、」云々とあって、そこに「易往無人の浄信」という言葉があるでしょう。ですから、この浄信というのは、本願の成就の信心を表す言葉を『無量寿如来会』の方から持ってきた。ですからここまでは直心・信楽・真心という「金剛不壊の真心」までは、至心・信楽・欲生と、因願なのだけれども、この「易往無人の浄信」のところは成就を言っているのです。『無量寿如来会』は成就文だから、この言葉を持ってきているということは、行き易いけど、往く人はほとんどいない、そういう清らかな信心という意味なのだけれども、この言葉遣いからして、因願と成就文を並べたのですよと。こういうことを申し上げたと思います。いいですか。

質問者1・・・はい、ありがとうございました。

質問者2・・・先生の御本の高僧和讃の本（『高僧和讃講義』1～4 方丈堂出版）を読んでおりましたら、どこから機の自覚を言い始めたのかなと思ひまして、そしたら『大経』の三毒五逆段を長く引かれております。そして、それは人間の実態を詳しく述べていると思ひまして、それだけの自覚が初めかなと思ったのですが、それからずっと流れとしまして、曇鸞は三不信を説かれて、不一・不淳・不相続、そして本願の名号に、それから道綽は三不三信を説かれて、善導は三心釈を言われて、だからそう言うことを流れの後から機の自覚という、こういう流れなのでしょうか。

先生・・・おっしゃるように『大経』でいうと、衆生のことを説いているのは三毒五悪段しかないですね。ですから、私たちの念仏生活の中で私たちが超えなければならないのは、貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱だと、それをお釈迦様が教え戒める。ですから三毒段の終わりには教戒、こういう言葉が出てきます。お釈迦様が教え戒めて、そういう人間の欲望を超えていきなさいと。そしてこの三毒がもとになって五悪という生活が始まる。だから五悪段の一番最後にも、この教戒と言う言葉がまた出てきます。ですから『大経』で申し上げると、衆生の嫌な姿、超えなければならない姿をよく説いているのが『大経』の三毒五悪段ということになりますから、おっしゃるように私たちの凡夫の自覚、その出発点は『大経』の三毒五悪段か、こういう意味ですね、一つは。それはそう取っていいと思います。そうだと思います。そしてそれがもとになって、今度は具体的に言えば、王舎城の悲劇が起こります。ですから、王舎城の悲劇をもとにして説かれていくのが『観経』ですから、『観経』は特に機の自覚を説いていくことになりますね。しかしもとは『大経』にあるのかとおっしゃるのならば、それはそう考えてもいいと思います。

そしてもう一つは、機の自覚と言っても、いいですか、凡夫の自覚、機の自覚と言っても、それは親鸞聖人がおっしゃるように行信不離でしょう。ですから信心として機の自覚が起こってもね、これは念仏に帰したのですよということがなかったら機の自覚になりません。例えば皆さん、大病をして病院に入院したら、「ああやっぱり人間は自分で生きていたのではない」ということが分かるでしょう。それも機の自覚に近いでしょう。近いけど本当の意味で機の自覚にならない。それはなぜかと言うと念仏がないから。そうですね、そうすると、龍樹と天親のところでは念仏による機の自覚は出てこないのです。龍樹は、「懦弱怯劣（にょうにやくこれつ）」「怯弱下劣（こじゃくげれつ）」（『十住毘婆沙論』）という言葉が出てくるけれども、あれは菩薩道に邁進してたけれども菩薩道に躓いた人の話だから、念仏ではない。表向きにはね。それから「帰命尽十方 無碍光如来」（『浄土論』）という世親菩薩の中には、機の自覚は一切出てこない、言葉として。

念仏による機の自覚が一番最初に出てくるのが、曇鸞の讚嘆門釈です。讚嘆門と言うのは南無阿弥陀仏と念仏するところだから、だから「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」（「行巻」）。あれは讚嘆門の言葉です。念仏をすると、凡夫には不一・不淳・不相続の根性しかないということが教えられるというふうに、初めて念仏と機の自覚がそろうのは、曇鸞の讚嘆門釈からです。ですから親鸞聖人は、曇鸞の讚嘆門のところに立って仏教を、真宗を理解することになります。だから曇鸞の「鸞」だけは外さない。親鸞という名前で、「親」という字を外しても、最後には「悲しきかな愚禿鸞」と言うでしょう。「鸞」だけははずさないでしょう。それは念仏による機の自覚を説くのは曇鸞が初めてだから。ですから、そこに立つ。

そういう意味で、曇鸞の讚嘆門釈が初めて念仏による機の自覚を明らかにしてくださったのだということは腹に納めておいてください。私が言っているのではなくて、そうなっているのです。だから、前にも言ったでしょう。世親の『浄土論』を引用するとき、世親の『浄土論』で本当に大事なものは「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」。これは大事なのですが、ところが、そこを全部オミットして、「我依修多羅 真実功德相」からしか引かない。世親の『浄土論』をね。なぜかと言うと、世親の『浄土論』の「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来」を引くと、これは菩薩道と間違えるからです。世親は菩薩でだから。世親の『浄土論』は菩薩道です。だから菩薩道の念仏なのかとこう言われるから、あえて世親の念仏を隠してしまって、そして、もう

一度曇鸞の讚嘆門釈を引いてきます。そういう引き方からしても、親鸞聖人の意図がよく分かるでしょう。世親までは世親と龍樹は一つにして菩薩だと。ところが曇鸞は念仏による機の自覚を初めて説いてくださった方だから、ここから実は、念仏による機の自覚が始まって、道綽・善導・法然と受け継がれていく。こういうことになります。

質問者2・先生、龍樹もですね、「念仏しなさい」と言っているところがありますが、その念仏はいったい何の念仏なのでしょう。

先生・龍樹の『十住毘婆沙論』をよく読むと、これはさっきも言いましたように、たしかに機の自覚、自力無効ということを表す言葉が「儻弱怯劣（にょうにやくこれつ）」「怯弱下劣（こじやくげれつ）」という言葉が出てきます。しかしこれは龍樹の『十住毘婆沙論』を正直に読むと、念仏による機の自覚ではなくて、菩薩道から落ちこぼれた人の話。だから表向きには念仏による自覚とは読めないのです。ところが最初からずっと読んでいくと、たくさんの仏さんの名前が、「称えなさい、名を称えることによって救われますよ」と言って、「十方十仏章」と言ってたくさんの仏さんの名前が出てきます。そしてまた次に歌が出てきて、だんだんだんだんと、「十方十仏章」のたくさんの仏さんの名前から、最後には「弥陀一仏」になっていきます。最後は「弥陀章の偈頌（げじゅ）」、これは阿弥陀仏の歌になっていきます。

そうするとそれを今度は、こっちから読むと自力無効と言う言葉は、菩薩道から退転した人のことで、これは表向きには念仏ではないかもしれない。しかし親鸞さんのこっちから読むと、弥陀一仏しか仏さんはおらんやろうと。百いくつか仏さんはあるけれども、そんなのはいいんや。南無阿弥陀仏を称えたらいいのだというふうに読むと、龍樹は『大経』の阿弥陀如来を説いたのだというふうに読み切ったのが親鸞聖人です。そういうふうに読むと、一番最後の「弥陀章の偈頌（げじゅ）」から、今度は逆に読んでみると親鸞聖人は、と思われま。そんなふうに読むと、確かに曇鸞と同じ念仏による機の自覚と理解しても間違いではないと思います。親鸞聖人の読み方によるのです。あの人は天才だからね。十方十仏と仏さんたくさんいるけれども、最後は弥陀一仏でしょと、南無阿弥陀仏しかないのよと、最初から龍樹はそう言いたかったのよと言ってみると、確かにそうなのです。そうしてそこしか引用していません。あの方は天才です。

質問者3・先生今日はありがとうございました。「妙楽勝真心」というのを、先生がそういうふうにご覧になっているということですが、『論註』のところを読んでも何のことかさっぱり分からなかったのですが、そうすると、私どもに非常に関係があるということにびっくりしました。

先生・そうそう、びっくりするやろ。私もびっくりして泣いたのです。よく分かるでしょう。「もう手が付けられない」と。「馬鹿だから、救いようがない」と、「不可である」と書いてあるでしょう。「人間心によって浄土に生まれることは不可だ」と。「可能性はない」と。「けど私があなたのいのちになって、私があなたの信心にまでなります。と言って命を捨てたのが法蔵菩薩のはたらきなのだ」ということは『論註』読むとよく分かります。

質問者3・『論註』は何か雲をつかむような話と思っていたのですが、先生の話を知ると、身

に覚えがあることだと思っています。

先生・・・そうそう、僕もそう思います。曇鸞という人は、最初は頭がおかしいと思いました、僕は（笑）。この人は頭がおかしい人やと。最近は天才だと思います。偉い。実に具体的に一つ一つ丁寧に丁寧に書きながら、実はこういうことよということを一生懸命言っていると思います。だからあなたの身の事実を言っている。

質問者3・・・ありがとうございます。それから、もう一つ、河野さんに引き続いてですけど、三不信と三信について、『高僧和讃講義』で先生は道綽で三信と言って、三不信と否定的な言い方を三信と肯定的に言って如来の心を表しているのだとおっしゃっています。先生その後でですね、道綽から善導の流れですね、そうしたら道綽というのは「観経系」、下四祖を「観経系」と聞いて、それで、その三信から善導の三心に至る流れが先生の『高僧和讃講義』の本を読んで、私はつかめなかったのです。

先生・・・もう一回言うと、曇鸞の「三不信」、そして道綽の「三不三信」、それから善導の「三心」ということですね。それは、そんなふうを考えるのだけでも、ちょっと待ってね、不一、不淳不相続、これが曇鸞の三不信ですね。念仏を称えたときに、私たちに一というよろこびではなくて、いつも二です、人間は。私を中心にしていいか悪いか、いつも二の心しか起こらない。だから一の心が起こらない。一心に信じるなんて言うことは起こらない。

それから淳（あつき）心がない。不淳。そして相続心もない。こちら側が機の実相。そうですね、これが曇鸞の仕事。ところが道綽は、これにただ一心・淳心・相続心をくっつけただけです。この反対の言葉をひっつけただけです。それを三不三信と言いますね。ところが道綽にここに、「この三信を具して若惹不生者」と言う言葉が添えられます。「この三信を具して」というのは『観経』の三心釈（さんじんしゃく）の言葉です。こちら側（若不生者）は『大経』の第十八願の言葉です。そうすると、こちら側（この三信）は『観経』で教える機の自覚、自力では救われないということ。こちら側は、一心、淳心、相続心というのは『大経』の第十八願だとすると、これはこのまま、一心＝至心・淳心＝信楽・相続心＝欲生と、こういう意味をしているのだということが道綽の指示で分かります。この三不三信の教えを善導が師資相承します。これは『法然全集』を、大部な本がありますが、あれを一生懸命読むと何度も出てきます。どう書いているかと言うと、法然は、こっちは（不一・・・）は機の至らなき、愚かき。だから善導は道綽の三不三信を、こっち側を（不一・・・）を『観経』の自力無効と読んで、そして、行でいうと雑行と、こういうふう引き継いだのだと。こっち側（一心・・・）は、一心・淳心・相続心というのは、至心・信楽・欲生のことだから、こちら側を専修念仏と引き継いだのです。この三不三信を雑行と専修念仏と引き継いだところに道綽と善導の師資相承があったということは法然が何遍も言います。

ですから、いきなり三信を持ってこないで、まずは法然の言う通りに理解すると、こっち側（不一・・・）は雑行、こっち側（一心・・・）は専修念仏と引き継いで、善導大師はこっち側（一心・・・）に立ったのだと。そこに道綽と善導の師資相承があるはずというふうに法然が、そうね、三、四遍言っています。そしてそれを見破ったのは源信だと言っています。だから僕らは七祖の中で一番分かりにくいのは道綽と源信なのだけど、法然は七祖の中で一番偉いのは道綽だ

と、そして道綽と善導の師資相承を見抜いた源信、この人も偉いと、三遍も四遍も言ってますから、まずは法然の教えからすると、こういう形で引き継いだのだと、師資相承が起こっているのだというふうに言っています。

ただしここに問題があります。なぜかというと、曇鸞・道綽までは信心の話をしています。善導はそれを行に変えている。明恵はそれを知っていました。明恵は。だから「法然が念仏・念仏言うけど、道綽と善導のところで信心を念仏に変えているのではないか。師資相承した、師資相承したと言うけど、そんなものは、信を行にひっくり返してしまっ、そして師資相承したとあなた達は言うけど、あれは絶対おかしいからね」と言ったのは明恵です。明恵は偉いでしょう。ここに信から行にひっくり返していると明恵は批判するわけです。信心は信心のまま継承しなさいと。そうするとあなたがおっしゃたように三信とどんな関係になっているかはっきりしなさいと。こういう話になるのだけでも、そこはあまり言われていない。こういうふうに譲渡したと、師資相承したのだというふうに、源信が『往生要集』の中で書いているのです。

質問者3・・ありがとうございました。

先生・・ちょっとややこしい話になったけど、実に、よく勉強すると面白いところです。ちょっと難しい話になってごめんね。しょうがないよ、質問が難しいから（笑）。

田畑先生・・どうもありがとうございました。ちょうど4時半になりましたので、今日の予定はこれで終わらせていただきます。（恩徳讃、終了）

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん

添削：田畑正久先生、住職